

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈他者〉を楽しみ続ける音楽科の授業づくり：音楽づくりに重点を置いてカリキュラムを編む
Author(s)	音楽科研究部,
Citation	研究紀要 / 広島大学附属小学校, 52 : 93 - 94
Issue Date	2024-07-30
DOI	
Self DOI	10.15027/55617
URL	https://doi.org/10.15027/55617
Right	
Relation	



〈他者〉を楽しみ続ける音楽科の授業づくり ー音楽づくりに重点を置いてカリキュラムを編むー

音楽科研究部

1 新たな表現をする自分・友達に出会い、音楽のよさを見いだすこと

本校の研究テーマ「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」のもと、音楽科では、〈他者〉を特にどのようなようになるか分からない即興的性質と設定し、その場で生まれる音楽に没頭し、多様な表現のアイデアから互いに学び合い、誰もがそれぞれの音楽のよさを見いだしていくことを目指してきた。即興的性質に重点を置いてきた理由は、カリキュラムの大半を占める楽曲表現が音をそろえることを目指すため、技能習得に労力を割くことや、はみ出すことやできないことを失敗とする暗黙の価値観に対する問題意識にもよる。多様な背景を持つ子ども達が安心してのびのびと表現し、新たな表現をする自分に出合ったり、自分にはなかった友達の表現に出合ったりして、それぞれが音楽のよさを見だしていく授業をつくりたいと考えた。

2 音楽づくりに重点を当ててカリキュラムを編む

本研究に基づく一連の実践の成果は、子どもが見つけたよさに左右されるため、何が身についたのかという学力論の問題が浮上したり系統性が問われたりした。これに対し、「子ども達は試行を繰り返すなかで創造性を発揮しようとし、本時は子どもにとって本授業はあくまで通過点の一つとして位置づけられている」という特徴が挙げられた(伊藤, 2022)。しかし、カリキュラム全体の教育力を高めるためには、子どもの学びの前後に見通しを持ち、より内容を厳選してカリキュラムを構成していく必要がある。そこで、本年度は一連の音楽づくり(即興演奏を含む)の実践をカリキュラムに落とし込み、音楽科の中での連動性を持たせようと試みた。

実践から得られた所感では、音楽づくりの題材どうしの系統性よりも、【基礎・基本】との連動が効果的であると思われた。特に、その場で拍感等の力を発揮することが求められる即興演奏と、一つの表現を完成させる音楽づくりとでは、カリキュラム上で効果的な連動を実現する道筋が異なるように思われた。

(1) 音楽的感覚【基礎】と連動させて即興演奏の題材を仕組む

拍のある即興演奏では、拍にのって瞬間的に反応していくことが必要である。拍感は基礎となる音楽的感覚であり、即興演奏の実践では一人ひとりがどの程度拍感を体

得していたかを教師は見取った。カリキュラム上では、音楽的感覚が一時間や一題材で身につけるものではなく、ゆるやかに育まれるものであるという性質を考慮して日頃の常時活動と連動することが不可欠であった。また、即興演奏の最中にも音楽的感覚は生まれ、失敗が存在しないからこそ活動の中でゆるやかに身につけていくことが許容されるという教育的価値があった。

手立てとしては、子どもの創造性を育むことを目指した「TASモデル」を参考にした(坪能 2020)。TASモデルとは、授業者の T (teacher), A (Adviser=音楽研究者や作曲家), S (Supporter=演奏家) の3つの役割を明確化したものである。TASモデルの実践では、①演奏によって学びを深める役割、②活動を音や音楽によって支える役割、③憧れや意欲を持たせる役割としてSが機能していたと報告された。創造性をあくまで子ども達が発揮することを重視していたために、これまでは教師の表現を聴かせることを避けていたが、子どもから表現のアイデアが出尽くした頃に、不足している表現を補ったり豊かにしたりするための意図的な演奏を教師が行い、言葉を用いない指導の効果をねらった。

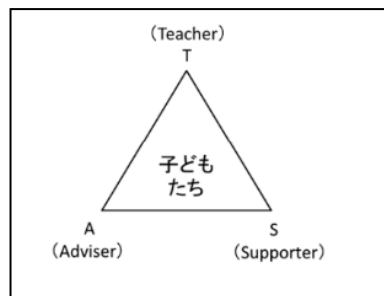


図1 TASモデル (坪能 2020)

(2)技能【基本】と連動させて音楽づくりの題材を仕組む

即興演奏でなくとも、音楽づくり（ここでは自分が決めた一つの表現を完成させること）の過程では、色々な発想で試行錯誤する活動が行われており、その過程は即興的ともいえる。即興的に試したりお気に入りの表現を実現したりするためには、基本となる技能が必要である。「誰にでもできる」ことは、失敗の存在しない即興演奏のスタイルで可能でもあり、誰もが習得しつつある技能が前提があれば可能である。特に、基本的な技能のみでできる音楽づくりの条件は、情報過多になりがちな表現をシンプルにさせ、適切な〈他者=新たな表現〉に注目して聴くことを促した。カリキュラム全体を圧迫しないように基本的な技能を育成する題材との連動を密にすることは、「誰にでもできる」音楽づくりの達成につながった。

引用・参考文献

- ・伊藤真「芸術教育としての音楽の授業－他者と自己に向き合う〈聴く〉という行為－」広島大学附属小学校学校 教育研究会, 学校教育 No.1258, 2022, pp.6-13
- ・坪能由紀子「学校教育における音楽科の役割と意義 その2－SDGsと『誰にでもできる音楽づくり』－」音楽教育学 52 巻 2 号, 2023, p.86-87

(文責 梅比良 麻子)